



TITLE:

<批評・紹介> 水野清一・増村宏・
大島利一編「昭和九年度東洋史研
究文獻類目」

AUTHOR(S):

森, 鹿三

CITATION:

森, 鹿三. <批評・紹介> 水野清一・増村宏・大島利一編「昭和九年度東
洋史研究文獻類目」. 東洋史研究 1935, 1(1): 67-69

ISSUE DATE:

1935-10-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138662>

RIGHT:

水野清一・増村宏・大島利一編

昭和九年度東洋史 研究文獻類目

詳しく言へば、右書は水野君の監修・總纂下に於いて増村、大島兩君の分纂する所であつて、増村君は歐米の部を、大島君は日本支那の部を擔當したのである。収録雜誌目を見るに、日本の部は八十二種（内に論叢五種を含む）の多きに達し、東洋史關係の雜誌は略々網羅されてゐる。支那の部は四十六種（便宜上、内に奉天圖書館季刊を含む）であつて、我國に於いては有數の蒐集振である。尤も民國で刊行された同類の

書『國學論文索引』等と比較すれば、収録雜誌數はその四分の一にも當らぬ状態である。然しその二百種に登る雜誌を検するに、零碎で蒐集に困難なものもあり、又載録に値せぬくだらぬものも少くないから、眞に國學即ち支那學に必須なものは餘程その數を減ずるであらう。従つてこの類目に於いても、収録雜誌を更に二十三種も増加するならば、大概遺憾なきを得るであらう。次に歐米の部は十五種であつて、日本、支那の部に比して甚だ貧弱である。類目とは言へ、此部のみは著者別索引の形式を採り、日本、支那の部とは趣を異にしてゐる。頁數とても僅かに六頁であるから、敢へて内容的な分類を施さなくとも、檢出にさして不便を感じない。以上記す所に據つても判る如く、本書の主眼は日本、支那の部に在り、歐米の部はむしろ附録として添加されてゐるやうである。

扱、日本、支那の部は共に一般史・歴史地理・社會史・經濟史・政治史・法制史・宗教史・學術思想史・科學史・文學史・美術史・考古學・金石學・民俗學・言語文字學・書誌學・叢書紀要雜纂・辭書事典・學界消息の十九綱に分類し、更に九十子目を設定してゐる。

る。日本と支那の論著を同一の基準で分類排比することは新しい試みであつて、しかも相當に成功してゐる。しかし小さい不調和が一二見受けられる。例へば歴史地理に於いて支那の部は更に通論・古地理・古籍地理考釋・方志・遊記の五子目に區分されてゐる。勿論細分に値するだけの分量もある。然し日本の部では細分すべく餘りに貧弱で五子目は名のみとなり了つてゐる。又考古學と金石學との關係を觀るに日本では寥々たる金石學の論文が支那では多く考古學は又それと正反對の狀況を示してゐる。是等は日支兩國に於ける斯學の由來、成立を異にする爲めに生じた現象であつて、分類の拙劣に起因するものでないこと勿論である。むしろかゝる徴候を表出する所にこの分類の合理性を示してゐるのである。この分類をより、合理的にすることは編纂諸氏がその後も引續き碎心されてゐることであらうが、今、讀過の際の感想を一二述べてみよう。先づ一般史に於いては專著と史料——假に『國學論文索引』の用語に據る——を區分しては如何。例へば三二頁下段の「穆傳之版本及關於穆傳之著述」や「記舊鈔本穆天子傳」等は專著として時代史——『國學論文

索引』では歷代史料と言ふ——より抽出した方が見よくないだらうか。此類目の歴史地理に古籍地理考釋なる子目あり、言語文字學にも古籍言語學なる子目が設けてあるやうな意味で一般史に於いても、いはゞ古籍歴史學即ち專著の目を設けた方が時代史中に混在するよりも整然としないだらうか。次に社會史の子目、家族と民俗學の子目、習俗との關係である。例へば董家遵の「中國外婚制與內婚制」は前者に屬し、同じ筆者の「從漢到宋寡婦再嫁俗習考」は後者に屬してゐる。又、丁山の「宗法考源」は前者に屬し、吳承仕の「中國古代社會研究者對於喪服應認識的幾個根本觀念」は後者に屬してゐる。言ふまでもなく、是等は同一の項目中に包含さるべく、割裂分隸さるべきではない。故に習俗中より宗法・婚姻に關するものを家族中に移讓しては如何かと思ふ。次に學術思想史の群經・諸子等に一應は屬するものも能ふる限り他の綱目へ移管すべきであらう。例へば「段懋堂顧千里論學制書評議」は同じ學術思想史中の教育へ「鞠躬易拜議」は民俗學の習俗へ移しては如何。假令分類上にかゝる不備があるとすると、それを克服するに足るだけの用意が此類目に

は出来てゐる。即ち卷末十七頁の人名索引が是である。『國學論文索引』の如きは既に第三編までも刊行しながら、未だ人名索引の編纂を怠つてゐる。我國の大家史學會から出版せられた『東洋史論文要目』も亦、同様の闕典を有つてゐる。燕京大學引得編纂處の『日本期刊三十八種中東方學論文篇目附引得』に於いて始めて人名索引が具はつたのであるが、自國の論文索引並にその著者索引の編纂は未だ試みられてゐない。昭和九年度刊行のものに限るとはいへ、日本、支那の文獻類目とその著者索引とを併せ作製したことは實に本書を以て嚆矢とする。その外、文獻に一々番號を附して檢出を確實容易ならしめ、各文獻の頁數を克明に注記してその内容を想見せしめるなど編纂者の細心なる配慮が各所に横溢してゐる。誠に「囊中の物を探るが如く至利至便の書である」といふも過言ではない。恐らくこの企圖は自今以後も續行されるであらう、又されねばならないが、一方既往にも遡り、完全なる「東洋史研究文獻類目」が結集されることは、我人共に冀望する所であらう。

(四六倍判八九頁、昭和十年七月東方文化學院京都

研究所發行、定價八拾錢)

(森 鹿 三)